

## XI 留学生主体の公開討論会 ——開かれた「日本事情」をめざして

佐 藤 勢 紀 子  
東北大学

### 1. はじめに

近年、外国人留学生を対象とした「日本事情」という授業科目を、異文化教育ないしは多文化教育の場として捉えようとする見方がさかんになっている。そうした立場から、日本事情の授業を日本人学生も受講できる形で運営する試みが、多くの大学で行われるようになった<sup>1)</sup>。留学生・日本人学生共修の授業のあり方については、既にいくつかの報告があり、その教育効果や問題点について様々なことが論じられている。筆者の担当する東北大学の日本事情の授業においても、平成9年度より、正規履修者としてではないが、日本人学生の受講を認めており、多文化教育の可能性を模索しているところである。

日本事情の授業を留学生・日本人学生共修の形で行うことの意義は大きいが、しかし、そこにはおのずから限界もある。「授業」であるかぎり仕方のないことではあるが、新たに教室の中に招じ入れられる「日本」は、たまたまその授業を受講した日本人学生が体現しているもの、または、せいぜいのところ、彼らが導体となってもたらされた日本の様々な断面にすぎない。それで十分とする見方もあるだろうが、閉鎖された教室の中に「日本」を取り入れるという発想にとどまっているかぎり、多文化教育の多彩な可能性を追求する者としては、壁に突き当たらざるをえなくなる。日本事情の授業では、教室に「日本」を取り込むだけでなく、時に教室を「日本」に晒すことも必要なのではないか。

また、これまで、筆者を含め日本事情教育に携わる者の立場としては、いかに留学生に「日本」を学び、また各自の出身文化を学んでもらうかということが最優先の課題であった。日本人学生との共修も、本来はその課題に取り組む上で一つの有効な方法として導入されたものであって、日本人学生に対する国際理解教育といった見方は、それに付随して出てきたものと思われる。しかし、現在の日本の高等教育における国際理解教育の貧困さに思いを致すとき、日本事情教育というものを、単に外国人留学生のためのものとして捉えるのではなく、日本人が「外国」を学び、「日本」を学ぶためのものとして積極的に位置づける方向も探究されるべきではないかと考える。そのためにも、日本事情の教室を、もっと開かれたものにする必要がありそうだ。

そこで、平成9年度後期に開講された「日本事情BⅡ」という授業において、受講者の留学生を主体とする公開討論会を企画し、最終回の授業でこれを実施した。本稿は、この公開討論会について、その抄録を中心に報告するものである。

### 2. 討論会実施までの経緯

公開討論会を開催するに至った筆者の動機は上記のとおりであるが、今回その直接のきっかけを提供してくれたのは、授業に出ていた一学生の意見であった。平成9年度「日本事情BⅡ」

では、「日本人の生活意識」というテーマに即して人生の様々な段階にある日本人の生活意識の解明を試みたが、その中で、大学生の生活意識を検討した際に、日本の大学教育について、バズセッションの形でグループ討論を行った。その日の出席シート<sup>2)</sup>には、この討論が面白かったという声がいくつか寄せられ、特に、ある日本人学生の、「こうした貴重な意見をこの授業内で終わらせてしまうのは残念だ」という記述が目についた。そこで、受講者を主体とした公開討論会を開催することを思い立ち、翌週の授業でクラスに諮ったところ、とにかくやってみようということになったものである。

問題は、いつ、どのような主題、形式で行うかということであるが、まず開催時期については、主体となる受講者の参加の都合を考え、授業の一環として実施することとした。ただし、授業期間中は他の学生や教官の参加が難しいと見られたため、補講期間中に開催日を設定した。次に、討論会の主題については、上述のグループ討論のテーマ「日本の大学教育」を、そのままとりあげることにした。これは、グループ討論で議論が白熱したことと、公開の場である大学で論ずるのに適した論題であることによる。また、討論会の形式としては、単にテーマを掲げただけでは意見が出にくいと考えられたため、留学生を中心に受講者の代表が話題提供をし、それをふまえて自由討論をする形を考えた。あわせて、この授業で行ってきた調査活動の一端の紹介をかねて、「大学生の生活意識」についての東北大学でのアンケート調査の結果を担当学生に再度報告してもらうことにした。

このような方針を固めた上で、宣伝用のポスター、チラシを作り、開催前の2週間をかけて受講者と筆者で宣伝を行った。

### 3. 公開討論会の内容（抄録）

#### 3. 1. 概要

上述の経緯により、1998年1月28日、日本事情のクラスを母体とした公開討論会が開催された。参加者は受講者14名<sup>3)</sup>、教育補助員2名、筆者、それに外部からの参加者が10名（うち6名が教官、4名が学生）であった。外部参加者が少なかったのは、宣伝不足と試験期間中であったことによると考えられるが、少人数であることがかえって活発で率直な意見交換を可能にした側面もある。

討論会の次第は次のとおりであった。

- (1) 経緯の説明（佐藤）
- (2) 参加者紹介（佐藤）
- (3) 調査報告「大学生の生活意識」（留学生T）
- (4) 話題提供（留学生S、M、A、W、Y、日本人学生KU）
- (5) 討論

この次第にしたがって、予定時間（90分）を大幅に超過した約2時間にわたり、討論会が行われた。以下、討論会の記録より、主要な部分を抜粋しつつ、その内容を紹介する。

なお、受講者については、留学生はアルファベット1文字、日本人は同じく2文字で表す。外部からの参加者については、たとえば「教官1」「学生2」のように表示する。

### 3. 2. 経緯の説明

佐藤 私は、その〇〇さんの意見を（出席シートで）見た時に、これは大変いいことだな、と思いました。自分としては、3点ばかり目的というか、考えたことがあるんですが、1つは、この授業を通して学生たちが得たことを皆様の前で、修了発表と言う形で公開させていただく目的がございます。それから、次は今日のテーマです。大学教育について、いろんなことが論じられておりまして、東北大学でも今実際に11年度からの改革ということを審議中です。しかし、そういうことを、教官と学生がいっしょになって直接論じ合う場があまりないんじゃないかと、一堂に会して、面と向かって話し合うということがなかったように思います。それで、そういう機会をぜひ、この際作りたいということが1つありました。それから、次ですけれども、これが一番私としては大事だと思います。私も留学生センターの教官は、5、6人とか、多くても20人、25人という、そういう少人数のクラスを持たせていただいて、学生の顔、名前、ちゃんと覚えますし、お互いやりとりのある授業ができると、そういう恵まれた立場にあります。それから、この授業、留学生向けの授業なんですけど、今年度から日本人学生にも出てもらっておりまして、日本人と留学生の交流の機会というのがこの授業の中であったわけなんですね。そういう、教師と学生との親しい、といいますか、お互い顔、名前がわかった上でのコミュニケーション、それから留学生と日本人学生とのコミュニケーションといったものを、少しでも多くの方々と共有する機会があればいいなと思いまして、こういう企画をしたわけなんです。

### 3. 3. 調査報告

佐藤 それでは、調査報告の方に入りたいと思います。これは、大学生の生活意識ということでアンケート調査をした結果ですね、報告してもらいます。WさんとT Oさんもいっしょに3人で。アンケートはみんなでとったんですけれども、3人でまとめてくれました。〇〇さん、あと続けてお願いします。

〇〇 Tさんは、モロッコ出身の学生さんで、工学部1年生です。Tさんは、とても明るくて、授業の中ではムードメーカーでした。

（以下、調査報告は割愛）

〇〇 このアンケートの結果報告について、質問などありましたら、お願いします。

教官1 このアンケートを集めるのは、留学生の皆さんがアンケート用紙を配って、書いてもらったんですか。

T そうです。

教官1 私の印象ではね、留学生の皆さんに、少し日本の学生はカッコつけてるなあという

(笑) 感じがしますね。現実よりよく書いているようです。

T      そうかもしれません。

佐藤    そうですね。それは学生生活のことだけでなく、たとえば、結婚についての意識を調べた時に、結婚したら家事は平等に分担するか聞いたんですが、分担するというのが非常に率が高かったんです、男性でも。それで、たぶんそれはカッコつけてるんだろうって言ったんですけど。(笑) どうしてもそういうバイアスがかかってしまいますね。

### 3. 4. 話題提供

OO      Sさん、セネガル出身で、工学部1年生です。最近、音楽に興味があるそうです。とても好奇心が旺盛です。

S      皆さん、こんにちは。日本とセネガルとの大学の教育の違いは何でしょうか。日本ではあらゆる勉強は大学で行われています。つまり、high education の象徴と言え、大学にあります。それに対して、セネガルでは high education そのものは必ずしも大学にとどまらず、多様な形式で構成されているわけであります。さて、日本とセネガルとのもう一つの違いは、日本の場合は、専門は2年生になってから始まることであります。また、日本の大学の場合は、教養科目は勉強に入ります。それに対して我が国では、大学に入るにあたって自分が選んだ専門に入り、さっそく始まることになります。最後となりますが、日本の大学はセネガルの大学と違って理論というよりもむしろ応用の面が大事にされているという感じがします。しかし、これは両方の国の歴史に起因すると私は思っています。皆さん、ありがとうございます。

OO      次は、イラン出身のMさんです。彼女は大変問題意識が強く、前々回、サラリーマンの生活意識ということで、実際にサラリーマンにインタビューして報告してくれました。今日はいい話題を提供してくれると思います。

M      皆さん、こんにちは。私はイランの大学の授業について、ちょっと話したいと思います。イランでは基礎の授業の人数が多いです。授業は200、300人で行われます。だから、先生はこの人数が多い授業で、理論しか教えることができません。この200人の学生は10グループに分かれて、1つのグループに20人ぐらいの学生がいます。1つのグループのため1人のティーチングアシスタントがいます。1週間に1回か2回、ティーチングアシスタントの演習授業が行われます。だから、この演習授業で、人数が少ないからたくさんの方の事を学ぶことができます。イランの大学では、先生だけでなく、ティーチングアシスタントの方でもたくさん学ぶことができます。以上です。

OO      次はAさんです。バングラデッシュ出身で、今、工学部1年生です。お願いします。

A 皆さん、こんにちは。私は、1996年の4月に（日本に）来て、そろそろ2年になりますが、日本の大学について、私が一番思ってるのは、自由、学生達は大学ではとても自由です。私の国では、たとえば、大学でも授業が始まった10分後、教室に入れません。そして、授業中教室出てはいけません。一方、日本ではけっこう自由で、学生達はもし自分で勉強できれば、学校に来なくても、ただ試験の成績がよかったらいいんです。私は別にバン格拉デッシュのこの制度はいいとは思わないけど、国の、その厳しい制度に慣れてますから、ここに来てすごい自由な制度に会って、私のためにはちょっと、自由すぎたんじゃないかなと。（笑）そして、あとは、日本の大学では、全然学生達の中に競争はありません。試験の時も友達に結果を見せて、皆で、A単位かB単位か取りましょとか、そんな考え方があります。でも、私の国では、たとえば私の入った情報学部45人の学生みんなが、1番になりたいという気持ちを持ってました。ちなみに、私は日本に来る前、バン格拉デッシュの大学に入ってたんですけど、1カ月過ごしてから日本に来ました。だから、私みたいなあんまり勉強好きじゃない学生のためには、それがよかったかなあ、と最初は思ったんです。2学期のこの今の試験の時に、これはいいと思いました。2学期の最初の2カ月半ぐらい私はあまり勉強できなかった。だから、どうしても試験にいい結果をできないといけないという感じをもって勉強し始めたら、たぶん、すごいプレッシャーをかけられて私は勉強できなかったと思うけど、今は自由でまあ何とかなと思って勉強して、すごく楽しめました。そして、おかげ様で、今までの試験は自分で満足しています。そこで、先程Tさんの調査の結果で、1つのことがとても気になったんですけど、「単位とるまでの勉強は楽ですが、自分の満足、納得いけるまでの勉強は大変だ」<sup>4)</sup>、私は、ちょうど今の時点の感想でこう思った。自分の納得できるまでの勉強は楽しいんです、ほんとに。単位とれる勉強は楽ですけど、それは精神的に大変だと思います。自分がわからないまま勉強してて試験に出るのは私は納得できません。あとは、先程調査の結果では、日本人は勉強のため大学に入ったという答えは圧倒的に多くて、40%ぐらいあったのに対して、毎日2時間の勉強は<sup>5)</sup>、けっこう悪くないと思います。というのは、たとえば、毎日2時間勉強するのは、1年間で800時間ぐらい。これはけっこうえらいことだと思います。（笑）皆さん、今日は来てくださりまして、ありがとうございます。

OO 次は、Wさんです。アメリカ合衆国の方ですが、カリフォルニア大学の交換留学生として来たそうで、そのカリフォルニアUCLA……

W UCSB。（笑）

OO ……の特徴をいろいろ聞かせてもらえと思います。お願いします。

W いいことを言ってくれてありがとうございます。今日はあの、お見合いみたいな形になってます<sup>6)</sup>。（笑）ちょっと、緊張しました。アメリカからのWと申します。出身は台湾なんですけど、7年前アメリカに行って、一応その大学に行きました。私は工学部

の学生ですので、アメリカの工学部の授業と日本の授業とちょっと比べてみたいと思います。まず授業の中では、アメリカだったら、みんな質問する、そういう雰囲気がいっぱいあるんです。アメリカにいた時、ある先生に、初めての授業の時、こう言われました。この授業で私の言ったこと、信じないでください。私の言ったことはほとんど正しいことじゃないですから、もし何かあったら質問してください。だから、みんな授業の中で、いつも手をあげてわからないことを聞くことがあります。ある場合は、先生は長い説明する時は、20分もかかってしまったんですけど、説明終わって、何か質問がありますかと聞いたら、ある学生に、最初からわかりませんでした、(笑) もう一度説明してください、と言われて、先生はまた最初から20分かかってもう一度説明することになりました。それは、日本とちょっと違うと思います。ここで、2つ、工学部の授業を受けていますが、そのクラスでは全部先生1人で、おっしゃっていただきました。もう1つは、アメリカだったら工学部の授業受ける時、必ず実験の授業を受けています。それは、今の授業に関する実験のクラスなんですけど、日本だったら実験と授業は別々です。それはちょっと違うと思います。最後に、(アメリカでは) 一番最後の授業の時、TAがアンケートみたいなものを配りました。そのアンケートは、学生が先生を評価するアンケートなんですけど、もし学生が何か不満があったら、書くことができます。以上です。

〇〇 次は、Yさん。彼女もアメリカの大学から今回留学生として東北大にいらしたんですけど、また、日本的発想も持っていて、興味深い話題を提供してくれると思います。

Y 私、10月に東北大学に来たんですけど、一番気づいたところは、東北大学の生徒と先生の交流が、見ててもあんまりないような気がして、それがちょっと気になる感じがします。私の大学では、先生たちはオフィスアワーというのを持っていて、それは生徒だけのための時間をだいたい1週間3時間ぐらい決めといて、その時間は絶対研究室にいます。生徒たちはその時間の間だったら気楽に、先生に話しに来てもいいんです。東北大学に来て、それもあんまりなくて、私の大学とはちょっと違うことをしてて。学校内の食堂で先生と生徒がいっしょに食べると、生徒は割引で食べて、先生の方はただで食べれる(笑) ようになってて、それが、ほんとにみんな気に入って、私も何回も先生といっしょにご飯食べました。にぎやかな雰囲気で先生と生徒っていう関係じゃなくて友達関係で話すことができるので、ほんとに気に入っていました。東北大学の先生達とも、そういうふうな関係を持ちたいなって思ってるんですけど、それまでにはいけないと思うけど、やっぱりもうちょっと先生達との、先生と生徒の交流があった方がいいんじゃないかなと思います。

佐藤 次ですね、中国のHさんの発表なんですけれども、Hさん、留学生の旅行でスキーに行ってしまいまして。(笑) 彼の名誉のために申し上げますと、そちらの方が先約だったんですね。彼はどちらかというと、この東北大学での教育が、まあいいんじゃないか

という立場でして、授業の時に出席シートといって最後にいろいろ書いてもらうんですが、その12月10日のところにこんなふうに書いてくれたんです。「日本の教育制度は、それほど悪いとは思っていない。留学生達はだいたい自国の教育制度に慣れているから、新しい制度に抵抗を持っても、ごく普通だと思う。ちなみに、私と担当教官の仲はいい方と思う。週に少なくとも1回ぐらい会っている。」ということで、「担当教官」というのはクラス担任の先生だと思うんですが、週に1度会うというのはちょっと普通じゃないというか、1年生としては珍しいと思います。それで次の回の時に、どうやって仲良くなったのか（笑）と聞きましたら、先生の方からいろいろ気をつけて下さって、話しかけてくれたり、という話でした。そして、次回出席シートには、「東北大学の先生達はだいたい親切だと思う」と。こういうふう to 受けとめている人もいます。同じような意見でしたよね、K I さん、日本人としていかがですか。

K I 僕としても、そんなに東北大の制度が悪いとは思いません。制度としてはそれなりにきちんと一つの整った形になってると思うし、むしろ生徒がもっと遊びたいから、さっきの自由というのを逆利用というのか、遊んでしまうというような傾向がある。ほんとに勉強がしたい人にとってはいい環境だと思うから、むしろそれを積極的にアピールして、東北大っていうのは研究第一主義なんだから、それなりの覚悟を持ってしっかりと勉強したい人に入って下さい、というようなことを言うべきじゃないかと思います。

O O 最後に、日本人代表として、文学部1年のK U さんをお願いします。シャープな意見が出て来ると思います。

K U 日本人のK U です。今日は一応、このクラスに出ている日本人の皆さんの代表という形でここにいますけれども、何か補足がある時は、遠慮なく後で自分の意見を述べて下さい。H さんといっしょに、高校生の生活意識というので、街頭インタビューであるとか、市内の男子校、そして予備校の調査をしてきました。その中でどうして大学に進学したいのか、その理由が面白かったんですけど、一番多かったのが「遊びたい」。(笑)そして、「時間に余裕がほしい」という意見がやっぱり多くて、今の高校生、中学生もそうなんですけれども、ほんとに受験受験という形で追いまくられて、カリキュラムに押しつぶされそうになりながら、自分の時間があまりないと、そういう自覚があるということが、非常によくわかりました。この間買った本でとっても面白いのがありまして、大学でぜひ出会いたい50人、という、作者は早稲田の卒業の方で、自分の大学時代に会ってすごい勉強になったという50人を書いているんです。例をあげますと、できる学生、できない学生、どこの大学でも上位5%、それからできない学生5%、その2つはとても面白くて、友達になって非常に参考になるというんですね。終電で会う酔っぱらい、普段大学では聞けない話がたくさんそういう酔っぱらいから聞けるという話でした。それから、不動産屋、自分で住む家を自分で探さない。それからですね、同性愛者、これは、自分の恋愛の対象が必ずしも異性であると限定する必要はないと、普段の価値観

をひっくりかえす意味で同性愛者と会うのもまたいい、という話でした。中で僕が一番面白かったのは、大学生にもなってゴルゴ13を目指す奴って話なんですけど、合理性とか論理性を越えたところにある仕事を目指す人が友達にいてっていうのは、自分が今置かれている枠を取り払う意味で非常にいいという書き方でした。私達の成長の中で、自分の可能性をどんどん狭めていくっていうのが、今の実情だと思うんですね。僕がこの授業に出ててとっても面白かったのは、たくさん外国の出身の方がいて、私達は普段日本という国の日本という文化の中で生活していますが、それって、どんどん自分を枠にはめていくことだと思います。そうじゃなくて、もっと他にいろんな世界があるんだってことを実感できた、そのことが、今年1年間でとっても面白かったことです。大学っていうところは、やっぱり自分の枠の中に入らないものを、見つけるところでもあると思うんです。たしかアメリカの教育学者でデューイという人が、「学校とは小社会である」と言ったと思うんですが、それは、外にある社会というものが理想化されたり、簡単な形になって、学校というものを作って行くんだっていう考え方だったと思いますけれども、僕はまたそれと逆の働きもあっていいと思うんですね。学校の中で、次の時代とか理想というものを考えて、それを社会へ反映させていくという、そういう形もまた学校の仕事だと思うんです、特に大学の。そして、そういう考えをするために、こういう、たくさん違う価値観を持った人が集まるというのは、とても大学のいい所だと思います。僕は今のカリキュラムがどうかということはもちろん考えなくちゃいけないことですが、それ以上に気持ちの持ち方ということで、自分の価値観を越えたところに何があるのか、ということを考えて、今非常に充実した生活を送ってます。僕からは、以上です。

### 3. 5. 討 論

(紙幅の都合上、以下については発言の要点のみ摘記。)

佐藤     これまでの話題提供に関して、何かご質問は。

学生1    先生方は、学生との交流がないというYさんの意見についてどうお考えか。

佐藤     資料に出した最近の新聞記事<sup>7)</sup>にあるように、大学での教師と学生のコミュニケーションが乏しいという調査結果が出ているが。

教官2    学部が上がれば、そんなことはない。1、2年の先生方にも、学生と話したいという先生もいると思うが。

佐藤     今日のテーマは「大学教育」だが、大学院や学部の上の方は対象外になっている。一般教育の段階ではなかなか先生方と親しくする機会を持ちにくいのではないか。



教官1 普通、先生の所に学生が遊びに行ったら、喜ぶはず。私自身も、いっしょに飲みに行くこともある。ただ、この頃は世代ギャップがかなり大きくなって、学生の方が教師を敬遠するということがある。今、私の所（大学教育研究センター）では、1年生が先生と接触する場を組織的に作るなどの改革を、平成11年から実施したいと計画している。

教官3 英語を教えているが、日本人学生は恥ずかしがって、自分から英語を使って話しかけようという気持ちを持つ人が少ない。Yさんに授業に出て話してもらったが、なかなか自分からは質問できない。外国語でコミュニケーションをとることに慣れていない。

佐藤 たしかに英語がネックになっている面がある。日本語でも外国人と交流できるはずだが、意欲的でない。先生方とのコミュニケーションでもシャイなのだろうか。

教官3 例外もあるが、だいたい先生とあまり話をしない。

学生1 周りの学生を見ると、先生と交流するという意識が薄く、ただ単位をもらえばいいという風潮が強い。いったい大学に何をしに来ているのか理解に苦しむ。今の日本の中高生は幽霊のような、実態のない大学を追いかけている。高校が大学の予備校化している。今の日本の教育制度はどうも狂っているような気がしてならない。

学生2 心理学をやりたいと思っていたが、入学してわかったのは、ここの心理学でやりたいことができないということ。大学から高校生へのアピールが見えない。求めないと見えない。先生との交流にも同じことが言える。僕は先生との交流があるが、僕から働きかけたから先生も求めに応じてくれた。なぜ働きかけたかと言えば、面白い授業で、教えたいという熱意が感じられた。一般教養では、いい授業はいいが、つまらない授業はほとんどつまなくて、先生と交流しようという気も起こらない。学問の楽しさを教えるような授業をしてほしい。授業のよしあしについての情報がほしい。鬼仏表はあるが単位がとりやすいかどうか基準なので、あまり参考にならない。制度改革の計画があるそうだが、初耳で、それはよかったと思う。もっと至るところで大学側からアピールしてほしい。

教官1 改革のことはセンターで学生に配っている曙光という新聞に書いてある。アンケート調査もしているが、回収率がよくない。授業に不満があるのなら、ホームページもあるのでどんどん言ってほしい。また、来年度から、1、2年生全員がEメールを使えるようにすることを計画している。先生との連絡もとりやすくなると思う。

佐藤 少人数クラスの導入について、学生が強い関心を持っているので、ご説明を。

教官1 平成11年度からは、全員には無理かもしれないが、希望者が入れるぐらいの数の少人

数クラスを作りたい。いろいろなクラスができると期待している。

学生1 少人数という話が出たが、語学、たとえば英語で、会話のクラスに60人というのは人数が多すぎる。もっと少人数にして、たたきこめるような環境を整備してほしい。

教官4 大賛成。留学生は皆さんとても日本語がうまい。一方日本人学生は、長年英語をやってきて、挨拶もできない。私はこの大学で2つやりたいことがある。1つは、外国語の授業をちゃんとやれる環境を整えること。教師の問題がその1つ。それと、東北大学は、T A I N Sという学内ネットワークが全国で一番早くできたにもかかわらず、この（一般教育を行っている）キャンパスにインターネットを使える所がほとんどない。そういう施設を作れば、C D - R O Mの教材を使い、インターネットを利用しながら外国語を勉強することができる。もう1つは、東北大学で教えている外国語の数は非常に少ない。いろんな外国語を通じて、世界にいろんな国があり文化があるということをお互いに知らなければ日本の国際化はない。そのためのメディアセンターを作ることが私の夢だ。しかし、大学という所はなかなか新しい方向には動かないので、学生から言っていく必要がある。MとAが前期、僕のクラスに出ていろいろ話してくれたが、日本人学生からの質問はほとんどない。学生が、もっと大学に対して自分の意見をぶつけてほしい。

T O 学生の要求は出していいと思うが、それを全部のむ方向に行っているのかどうか。大生の質がだんだん落ちていると聞いた。もっと試験を簡単にしてくれとか会話を重視してくれとか、学生が目先のことだけ考えて要求するのを受け入れていいかどうか。お互いに直すべきところは直した方がいいが、ものわりのよさを演じる必要はない。

学生1 さっき会話と言ったが、文法にしても、今のやり方では意味がないと思う。また、学生側の意見の集約という点でも、そのルートが限られている。何とかうまく一般の学生の意見を持ち上げていく方向に行けたらいいが。

佐藤 非常にまじめにいろんなことを考えている学生達はあるが、どこにそれを持って行っているのかわからないという状況があると思う。そういう場を作っていきたい。

教官5 非常勤講師の立場から、非常勤の意見もくみ取ってくれるところがほしい。また、専任の先生の授業についての意見交換はどうなっているのかということも知りたい。ある非常勤の先生から、学生達に授業についての不満をぶつけられ、授業にならなかったという話を聞いた。言われる教師の側はショックだが、ある意味で教師も学生に育てられているのだと思う。また、先生と学生の交流がないという話があったが、コミュニケーションを促すためには、共通の何かをいっしょにすることが大切ではないか。

佐藤 全く同感だ。私もこの日本事情の授業を通じていろいろ教えられた。一番多くを学ん

だのは私だったかもしれない。また、留学生と日本人、学生と教官のコミュニケーションを促進するために、留学生を中心としたネットワークを作り、そこで様々なことをいっしょにやってみたいと思っている。参加希望の方はアンケートにその旨書いてほしい。

#### 4. おわりに

以上、話題提供および討論における発言を中心に、公開討論会の概略を報告した。最後に、会場で配布したアンケート<sup>8)</sup>に書かれた、討論会への感想、意見を紹介したい。

- ・すばらしかった。(S)
- ・いろんな意見が出て、先生からの意見とかも聞かせてもらったので、とてもいい討論になったと思います。きかいがあればまた参加したいと思ってます。(Y)
- ・数人の教官の意見が聞けてよかった。もっと自分から教官の方へ働きかけなければ何も変わらないと思った。(KA)
- ・話の中にいろんな要素があってもっといろいろと話をしたかった。いろんな意見がストレートにきけてよかった。(TO)
- ・私、今日は一度も発言をしなかったのですが、聞いているだけでもすごいエネルギーを消費したような気がします。私は、もっと自分の考えを持ち、それを人にちゃんと伝えられる手法を身につけなければいけないと痛切に感じました。(IW)
- ・中途半ばな終わり方だったが、これを定期的に関き、大規模化することは、決して悪いことではないと思う。(OO)
- ・こういう機会はもっとあってよいと思う。基本的に真面目に討論できる場というのが少ない。アンケートではなく、直接的に対話することは重要だ。(KI)
- ・時間がこの倍は必要であった。会の雰囲気はほぐれてきて、これから留学生の方に聞きたいことを準備していたのだが……。 (学生1)
- ・よかった。ネットワークを広げたいと思う。教育センターじゃなく、自治会じゃなく、大学と生徒の中間的存在が必要だと思う。その中間的存在が、留学生をはじめとして、ネットワークを広げて欲しいと思う。(学生2)
- ・留学生の皆さんの日本語がとてもすばらしいですね (日本人学生もこれぐらい英語ができればいいのだけど)。それぞれ自分の意見をはっきり持っていることがすばらしい (目的を持って留学しているのだから当然かもしれないが)。日本の教師や学生ともっとコミュニケーションして下さい。(教官4)

このアンケートの回答にも見えているが、今回の討論会では調査報告と話題提供で時間を取りすぎて討論の時間が十分にとれなかった。特に、留学生と日本人が直接やりとりする場面がほとんどなかったことが心残りであった。今回の最大の反省点である。また、開催前にはあまり意識しなかったことであるが、実際に討論会を実施してみて、こうした留学生主体の討論会が、単に留学生と日本人の出会いの場、コミュニケーションの場を提供する役割を果たすだけでなく、大学の中での日本人学生と教官、また日本人学生同士の交流を促す上でも有効にはた

らく可能性があることに気づかされた。その意味でも、今回の経験を生かしつつ、今後も同様の試みを続けていきたいと考えている。

#### 注

- 1) 弘前大学、秋田大学、岩手大学、群馬大学、横浜国立大学、新潟大学、福井大学、信州大学等で実績がある。
- 2) 出席シートについては、本研究報告の第Ⅶ章を参照されたい。
- 3) ふだんの受講者は留学生11名、日本人学生8名の計19名であった。
- 4) 大学での勉強についての質問に対する回答例をTが紹介したもの。
- 5) 毎日の勉強時間が「2時間未満」という回答が圧倒的に多かったことを指す。
- 6) この討論会では、発表者和其他の参加者が向かい合う形で座っていた。
- 7) 1997年11月7日付朝日新聞に掲載された、全国大学生協連合会の調査に関する記事。  
見出しに、「人間関係苦手な大学生『クラスで付き合いにくい』4割／『教師と会話ない』6割」とある。なお、同調査の結果によれば、留学生との交流について、「ない」と答えた大学生は、全体の78.9%にのぼる。
- 8) 大学教育に関する提言、討論会についての感想や意見、留学生中心のネットワークへの参加の意思の有無等を尋ねたもの。